

文学と都市計画・序説

—フランス第三共和政における一つの問題の布置

彦江智弘

アレのもたらしたものから、私がなんとか逃れられるとしたら、やはり土木工事のようなことにでも没頭するほかはないのかも知れないもの。いまどきそうした事業が、私の手のとどくところにありうるとして……

大江健三郎『人生の親戚』

1. 小説と都市

ところで諸君、小説とは大きな道に沿って運ばれる鏡ですぞ。

スタンダール『赤と黒』

都市というテーマは、とりわけ小説においては、近代小説の隆盛が急激な都市化の時代と重なるという事情があり、たんなる作品の背景として以上の問題系を形成していることは周知の事実であろう。ヘーゲルが「近代市民の叙事詩」¹⁾と呼ぶとおり、確かに近代小説はフランス革命を経た19世紀において飛躍的に発展するのであり、市民社会の到来と不可分の関係にある。その一方で、市民社会の進展の原動力となったのが産業革命以来の社会構造の転換であり、それが招いた帰結の一つが都市部への急激な人口流入による従来の都市環境の内破という事態であった。このように近代という問題をもとに抱え込む都市が、文学にとって重要なテーマとなって

もなんら不思議はないだろう。日本の近代小説についても事情は大きく異なるものではない。明治期の文学における、いわゆる主人公が上京することを説話の一つの契機とする作品群の存在がこのような事情を端的に示している。都市とは田舎と対置された近代化されつつある社会であり、上京とはまさしく都市空間に参画することで近代化の問題を身をもって生きることにほかならない²⁾。つまり都市とは近代小説にとって本源的な〈地〉のようなものであるといえるはずだ。文学における都市を問題とする研究の多くが、この〈地〉としての都市を何らかの〈図〉として反転させようという企図のもと遂行されてきたこともまた周知の事実であろう³⁾。

もちろん『マンハッタン乗換駅』や『ベルリン・アレクサンダー広場』あるいは『ダブリンの人々』のような都市そのものをあらかじめ主題化した作品も確かに存在している。そのような作品においては、都市は直ちに〈図〉の位置を獲得しているというべきであろう。だがひとまずは〈地〉としてテキストに埋め込まれる都市と小説との間にはいかなる関係を想定しうるのだろうか。これについてジャン＝イヴ・タディエは以下のような図式化を行ってみせる。「意を決して、小説のなかの都市と現実の都市とを較べてみようか。それは文学を現実の反映と見るか、それとも現実との隔たりととらえるかという問題になる」⁴⁾。タディエは最終的にこれら二つの立場を共に退け、小説の都市がまずはテキスト的構築物であることを強調することになるのだが、そのようなタディエの立論の正当性を認めながらも、ここではあえてこの「反映」と「隔たり」にとどまってみよう。この章の銘句として掲げたスタンダールの名高い一節が告げているのも、ひとまずは都市が小説の〈地〉として紙面に忠実に写し取られるという前者の立場であるだろう。小説家は「鏡」を背負い、人や物と共に様々なドラマが行き交う通りを歩んでいく。「1830年代記」という副題が示すとおり、一つの時代のあれやこれやの風俗のみならず、もちろん物理的空間としての都市も自ずとそこに映り込んでくるだろう。このとき小説の価値はその忠実さによって測られることになる。「私はすでに存在するモデルを出発点として [……]、小説のテキストがどれくらい忠実であるか、あるいは忠実でないかを検証することになるだろう。都市の小説は、私たちがその都市についてすでに知っていたこと、あるいは都市についての潜

在的な理論上の知識について、すべてを語ったのだろうか。こうした潜在的な知識を私たちはすでに持っているわけではないが、私たちは持つことができる。というもこうした知識は、すでに歴史学、地理学、社会学の知るところであるからだ⁵⁾。もちろんスタンダールはこのような受動的立場をあえて引き受けたのであるが⁶⁾、これに対して後者の立場はむしろ現実との偏差に重きをおく。文体的価値が文法的規範との偏差によって測られるように、都市を描くに際して人は現実の都市に忠実である必要はない。むしろその変形にこそ文学性は宿っている⁷⁾。

都市計画史家のフランソワーズ・ショエもこれと似た図式化を行う。ショエによれば、「七月王制下において、バルザックの作品は都市に関わる言説の二つの主要な機能を模範的に例証している。一つ目の機能とは記述し、客観化するものであり、後の地理学や社会学や都市史の仕事を先取りしている。もう一つは批判的機能であり、都市問題一般および／もしくは同時代における都市問題の個別の側面に対して賛否いずれかの立場をとる⁸⁾。これら二つの機能はもとよりバルザック自身が『人間喜劇』の序文において社会に対する小説の関係として定式化していることではあるが⁹⁾、タディエが「隔たり」としたところを、ショエはさらに踏み込んで「批判」とするという違いはある。だが、いずれも小説と都市との関係が決して受動的なものにとどまらないことを強調する点では基本的に同じ図式を共有しているといえるだろう。さらに、『『人間喜劇』の大半を（文芸批評家としてより）都市研究者として読むことは、まったくただならぬ経験である¹⁰⁾と述べるデヴィッド・ハーヴェイのバルザックへの関心も、受動的リアリズムを超えたところに設定されている。ハーヴェイにとって、バルザックは同時代の都市を受動的に描き出したのではなく、「都市を読解し、それを読みやすくした。それによって、一見すると組織的でなく、ときとして分裂的さえある都市の変容過程を把握し表象し形作る方法を提供した¹¹⁾」のであり、そうすることで「第二帝政期の間に生じたパリの計画的な変容に関する想像的な前提条件を形成したのである¹²⁾」。つまり、バルザックの偉大さは受動的リアリズムを遙かに超えて、都市のマクロな変容自体を想像力のレベルにおいて密かに準備したことに求められる。

しかし同時代の都市の様々な側面に諾や否を主張し、場合によってはこ

れに介入し、都市の変容を導き出すような身振りは、必ずしも意識的に「隔たり」や「批判的機能」を求めない反映論的立場には全く無縁なのだろうか。むしろ消極的に扱われているかに見える受動的なリアリズムから都市への介入が導き出されることもあるのではないか。冒頭に掲げたスタンダールの引用に読み取るべきは、実のところこのような理路であるように思われる。『赤と黒』が「1830年代記」という副題を持つことはすでに確認したとおりであるが、具体的に何が小説家の背負う「鏡」に映りに入るのだろうか。ここで先の引用を元の文脈に差し戻してみよう。

ところで諸君、小説とは大きな道に沿って運ばれる鏡ですぞ。あるときは青空を、あるときはぬかるんだ道を諸君の目に映し出す。ところが諸君は不道德なのは鏡を背負い籠に入れて運ぶ男のほうだといって避難する！ 鏡にぬかるみが映ったからといって、鏡を非難する！ それよりも、ぬかるんだ道の方を避難するべきだろうし、さらには道に水がたまり、ぬかるみができるのを放置している街道監督官を非難するべきだろう。¹³⁾

この作品が執筆された1830年、スタンダールはパリで七月革命に遭遇し、その後、領事として任命されたトリエステへと旅立つ。しかしオーストリア領に足を踏み入れることさえ叶わず、翌年になってチヴィタヴェッキアに赴任することになるだろう。この引用にある「大きな道 *grande route*」とは、必ずしも都市の大通りを意味するわけではなく、このトリエステ行きにとどまらずその生涯を旅に過ごしたスタンダールが慣れ親しんだ数多くの街道のひとつを指していると理解すべきであろう。それに私たちの関心を引くのはこの街道それ自体ではない。実際、スタンダールが問題にするのも「大きな道」それ自体ではなく、むしろその道に残された「ぬかるみ」の方である。なるほど「青空」も彼の「鏡」をかすめはするだろう。だがここでもつばら議論されるのは、天の高みに広がる蒼穹ではなく、むしろそれに対置された地上の立ち往生、つまり、馬車の車輪を空回りさせ、旅人の足をすくう「ぬかるみ」の方である。

「青空」ではなく「ぬかるみ」。小説家の「鏡」に映るこの「ぬかるみ」

が私たちの関心を引くとすれば、それはまずリアリズムが問題とする現実が澄み渡った透明性ではなく、むしろ不定形や不透明さによって刻印されていることを予感させるからである。これ自体たいへん興味深いことと思われるが、さらにスタンダールはこの「ぬかるみ」から現実への介入を挑発する。「ぬかるみ」は確かに目の前に存在するからこそ「鏡」に映るのであり、「ぬかるみ」が問題であるならば、それを表象において美化するのではなく、まずは現実の「ぬかるみ」を解消しなければならない。そしてそのためには行政に道路の整備保全計画を見直させるという具体的介入が必要である。小説によるこのようなフィードバックが首尾よく成し遂げられるかどうかはここでは問わないでおくとして、それでもこのようにリアリズムから引き出される能動性もさして目新しい観点ではないのかもしれない。リアリズムはなにも美的な事物ばかりを対象にしてきたのではなく、むしろ社会の暗部、悲惨あるいは醜悪さこそを積極的に取り上げてきたという伝統がある。リアリズムのこのような側面はとりわけマルクス主義的批評によって評価されてきたわけだが¹⁴⁾、その一方で、リアリズムの「客観性」に対して慎重に振る舞うサルトルのような文学者の立場とここでのスタンダールの立場は実はさほど遠くはないのかも知れない。アンガジュマンの哲学者であり、「ぬかるみ」に落ちた紙切れに魅了される作家でもあるサルトルは¹⁵⁾、『文学とは何か』において次のように主張する。「このように私は、語ることに於いて、状況を変えようという私の企図そのものを通じて、状況を暴露〔開示〕するのだ。私は、それを変えるために、それを私自身及び他の人々に対して暴露する」¹⁶⁾。

しかしスタンダールの引用が私たちにとって興味深いのは、ここに都市というテーマを導き入れた際に予見される展望が故である。ここでは「街道監督官 inspecteur des routes」を土木工事全般のみならず広義の都市計画と関連するものと捉えておこう。この「街道監督官」が再整備した街道は原理的には再び小説家の「鏡」に映りこむことだろう。しかしそこにはまた新たな「ぬかるみ」が、あるいはまた別の交通の混乱、さもなければ何らかの都市問題が映りにやってくることだろう。そうすると再び文学テクストにより現実への介入が誘発され、そこで生み出された変化をまた「鏡」は映しだし……。ここにあるのは都市と文学との間に生まれる一種

の弁証法的過程であるといえはしないだろうか。だが、ユートピアの幻想が瓦解してすでに久しい21世紀に生きる私たちにとって、この弁証法的過程に最終的止揚の瞬間が訪れるとはにはわかには信じがたい。ならばここにあるのは、小説と都市とのはてなき循環であるというべきではないだろうか。もちろんスタンダールの小説によって実際に「ぬかるみ」が解消されるのかどうかは疑わしい。だが、文学がそれを「変える」ための契機を内在化し、あるいはそのように読まれるのだとしたら——ショエやハーヴェイがバルザックについていうように、小説の反映論的側面が分析的あるいは批判的側面に伴われていることも決して稀ではない——、潜在的にこのような循環性を生きていると考えることができはしないだろうか¹⁷⁾。

その一方で、都市をめぐるこのような循環運動はなにも小説にだけ見いだされるものではない。先に名前を挙げたフランソワーズ・ショエの『近代都市——19世紀のプランニング』を敷衍しながら若林幹夫は次のように述べている。

都市計画もまた、近代都市の出現が生み出した新たな社会的営みである。ショエの『近代都市』が示すのは、その営みには「都市とは何か」、「近代とは何か」をめぐる思考が伴っていること、それゆえ「都市計画」とそれが生み出した19世紀の都市空間は、近代都市という現実とそれをめぐる思考が生み出したものであるということだ。近代都市の誕生を受けて生み出され、働き始めた知と実践が、それ自体もまた近代都市の一部となっていくこと。ショエの『近代都市』を読むことで、都市とそれをめぐる知と実践の循環が、私たちが知っているような「近代都市」の、そして現代の都市の一部である [ことが分かる]。¹⁸⁾

都市計画は種々の都市問題を解明し、自ら介入を行って都市の新しい形を作り上げていく。その一方で、流動化した近代社会における都市の発展はやむところを知らず、近代都市は都市計画によって形を与えられると同時に、都市計画というこの知の実践に絶えざる更新を促さずにはおかないだろう……。こうしてみると、文学と都市という問題系は、むしろ都市を

間に挟んだ二つの循環運動を、文学者と都市計画家という二つの形象を浮かび上がらせることになりはしまいか¹⁹⁾。

2. 都市と都市計画

都市計画と都市との循環性はおよそ近代に固有のものである。例えば17世紀のフランスには未だ「都市計画 urbanisme」という語は存在していなかった。三宅理一によれば、「フランス革命以前のアンシャン・レジーム下では「都市計画」にもっとも近い言葉として「美装」(アンベリスマン)の用語が用いられていた²⁰⁾という。「美装 embellissement」とは、まさしく街を「美しく belle」装う美学的な空間整備のことであり、より具体的には道路整備により都市空間を美しく仕立てる技術のことであった。実際、ある時代までの都市計画は工学的である前にまずはとりわけ美学的であったのだ²¹⁾。ここでは権力と結びついた美的理想を実現するために都市は構想されるのであり、様々な混乱が都市空間のそこので引き起こされようとも、それらはむしろ副次的な事態であって、それ故に私たちが問題にしているような循環運動は決して本当には姿を現さないだろう。もちろんこの時代においても都市は美学的であるだけでなく、政治/社会的な空間でもあるべく要請されていた。このことに関して、ショエを敷衍する若林幹夫によれば、近代以前の都市は社会システムや制度と関連づけられ、安定したコミュニケーションと情報のシステムを形作っていたという。ところが、近代社会はこれを破壊してしまう。従来の都市の枠組みを凌駕する人口の凝集体においては、もはや「全体的で包括的な意味のシステムとして都市を理解することができなく」²²⁾なり、このような状況から近代的都市計画が誕生する。都市計画と都市との循環運動もこのような現実の不透明性を介してこそ成立するものと考えられるだろう。

ところで、スタンダールは先に引用した「鏡」のメタファーを『リュシアン・ルーヴェン』の序文でも引き合いに出している。「むかし、ある男が熱をだし、いましもキニーネを飲んだところだった。彼はコップを手にもち、苦しいので顔をしかめながら鏡をのぞきこみ、自分の顔が青く、少し緑色にさえなっているのを見た。急いで彼はコップを捨てて、鏡にとび

つき、それをたたきこわしてしまった」²³⁾。こうしてスタンダールは、自らの小説がこの「鏡」のように打ち砕かれてしまう危惧を示唆するのだが、ここで興味深いのは、現実の不透明性がここでは「ぬかるみ」ではなく「病」に置き換えられている点だ。この「病」のメタファーは、面白いことに、都市計画においても常套句として使われてきた。例えばル・コルビュジェは『ウルバニスム』において、自らの都市計画の原理を描き出すだけでなく、それを踏まえ、「明確な場合、パリの中心」を検討している。そこで彼はパリの都市問題に取り組むためには二つのアプローチを検討すべきだとする。すなわち、「内科治療 *médecine* か外科手術科 *chirurgie* か」という二者択一的方法論である²⁴⁾。ここで問題となっているのは、パリ中心部の無秩序な再開発が交通網に癌のように巣くうことで引き起こされる都市の循環器系の機能不全である。これに対して主に法令で対処するのが「内科治療」であり、都市計画として介入するのが「外科手術」というわけである²⁵⁾。実際、『ウルバニスム』の掉尾を飾るのは、数枚の人体解剖の図像である。

都市を人体と見立て、そこに医学的に介入するという譬喩はいまやいささか陳腐に感じられもするが、これは同時に逐語的なものでもある。事実、近代都市が社会にもたらす混沌の一つは医学的問題として立ち現れるからだ。土地利用や交通問題などが近代的な都市計画の枢要として数え上げられるのはごく自然の成り行きといえるが、公衆衛生もそれらを上回る重要性を持っていた²⁶⁾。とりわけ19世紀後半においては、「公衆衛生は新たな包括的科学として登場する。それにより決定的な仕方ですべての都市的ものへの現代的な介入法が発達する」²⁷⁾とさえいわれる。急激な人口の稠密化が住環境の衛生状態を悪化させることは容易に見て取れるが、近代的な都市計画が誕生した19世紀はコレラが断続的にヨーロッパを見舞った時代であり、とりわけスラム化した街区において甚大な被害をもたらす。コレラを初めとする感染症に対処すべくコッホやパスツールらが主導する細菌学が発展し、同時に上下水道の整備や道路の拡張、あるいはスラム・クリアランスが市街地整備事業の無視しえない課題となる。いうなれば都市計画は都市に対する臨床治療でもあったのだ。

その一方で、さらに医学的譬喩に読み取るべきものがあるとすれば、そ

これは都市計画が医学と同じく科学的な学問領域をなしているということであろう。これは都市計画という学の成り立ちと、私たちとしてそれをどう捉えるかという問題を提起するものだ。実際、都市計画は都市の科学たらしめんとする欲望と共に生まれた。フランソワーズ・ショエによれば、「都市計画 urbanismo」という語が初めて用いられたのは、イルデフォンソ・セルダのバルセロナ整備拡張計画においてである。「人間の空間を整備するための科学を練り上げるというセルダの計画は、実務家として参画したバルセロナの拡張計画を真理として確立するという彼の意志から生まれたものだ」²⁸⁾。一方、フランスでは「都市計画 urbanisme」の語が登場するには、さらに1910年前後を待たなければならない。しかしこの語も黎明期から科学への意志によって支えられていた。事実、1905年には「都市計画家 urbanisateurs」という語が初めて使用されるのだが、これは労働問題・公衆衛生・都市問題などを統合する研究・啓蒙・政策提言組織であるミュゼ・ソシアルのメンバーによるものだった²⁹⁾。なるほど用語の問題に拘りすぎるべきではないというのも一つの見識ではあるだろう。例えば、第二帝政下でオスマンがセヌ県知事として成し遂げたパリ改造も都市計画と言い習わされている。しかしオスマンの業績はあくまでも首都の「整序化 régularisation」であるとして、ショエはこれを退ける。「要するに、彼は理論家として振る舞っているわけではない。彼は自らの解法を一般化するわけでもなければ、ましてやそれを科学によって保証しようとするわけでもない」³⁰⁾。オスマンのパリ改造を「外科手術」に分類するル・コルビュジエもどうやらこの点を見誤ってはいなかったようだ。「オスマンの設計は全く勝手なもので、都市計画の厳密な結論ではなかった。それらは、財政と軍事上の処置であった」³¹⁾。

日本の場合どうか。ここでは手始めにごく最近の事例を取り上げてみよう。2014年に出版されたある本の中で、都市計画家の箕原敬が次のような発言を行っている。「ただ、日本人が書いた『都市計画の教科書』を、僕が育ってきた[欧米の]計画的なカルチャーから見ると、ずいぶん内容が偏っています。まず、相変わらず都市計画は工学的なエンジニアリングだと言い続けているのですが、それは間違いです。[……]だから科学としての内省にたった、[……]一連の計画、実行、計画の修正にかかる意

志決定のあり方などについての客観的な記述がほとんどなされていない。大部分の方は、都市計画とはただの制度にすぎないと思っていないか³²⁾。事実、多くの都市計画の概説書を紐解くと、広義の都市計画としてその歴史的背景や変遷に手短にふれた後、都市計画法の枠組みに位置づけられた都市計画の様々な側面が本論として解説されていく³³⁾。同様の記述スタイルは『都市計画用語事典』の「都市計画」の項においても、さらには『人文地理学事典』の同項においても採用されている³⁴⁾。1968年に制定されたこの都市計画法は新法と呼ばれ、これに遡ることおよそ50年前の1919年に日本で初めての都市計画法（旧法）が制定されており、これをもって日本における都市計画の嚆矢とするのが一般的である。これ以前の1888年に制定された東京市区改正条例はその名称の示すとおり、東京に限定されたものであった上に、既成市街地の再整備事業を目的としていた。つまり、あくまでも首都を近代的なインフラを備えた都市に仕立て上げることが主眼だったわけである³⁵⁾。その後、工業化の進展と共に、東京だけでなく地方都市においても人口集中などの都市問題が顕在化し、都市のスプロールを効率的にコントロールすることが喫緊の課題となる。これを背景に旧法が制定され、日本における都市計画が確立する³⁶⁾。都市計画の確立が法制度の整備と重なるというこの見方自体、日本における都市計画のあり方を雄弁に物語っているだろう。日本の場合、急激な近代化のため国が強大なイニシアティブを発揮して都市整備事業を進めたこともあり、片岡安のような建築界から財界をまたぐ民間のプランナーが重要な役割を果たした例もあるとはいえ³⁷⁾、都市計画は当初から制度の枠組みに位置づけられていたという事情がある。渡辺俊一の『「都市計画」の誕生』によれば、「しかし結果的には、内務省の都市経営路線の文脈に建築界の技術的知見が繰り込まれる方向で、事態は進展³⁸⁾したという。そしてここから日本における都市計画が科学への意志に先立って「工学的なエンジニアリング」の制度として発展していったことは想像に難くない。

なるほど、科学性をことさら主張するわけでもない、ある意味、無防備な都市計画や土木事業が、例えば統治の工学的ツールに容易に成り下がることも確かにあるだろう。その反面、ことさら科学を主張することで、かえって知と権力というフーコーの主題を呼び込むことにもなりはしまいか。

科学としての都市計画への接近には一定以上の慎重さが必要になるはずだ。それにオスマンにせよ、東京の市区改正にせよ、またそれ以降の日本の都市計画にせよ、あるいは種々の土木事業にせよ、シヨエと共に私たちが先に問題にした都市との循環運動に巻き込まれていることに変わりはないはずだ。いずれの場合も流動化した時代の都市の現状を反映し、介入を行い、都市の新たな発展によりさらなる更新を促される。CIAMで中心的な役割をはたし、「アテネ憲章」の実質的な起草者でもあるル・コルビュジエについて、今村創平も次のような注意を促している。「こうした歴史を画するともいえる建築家たちによる提案とは別に、政治家や官僚、ディベロッパーといった実務家による各都市の整備も着実に進められていた。それらは建築史においては著名な建築家の活動ほど目立たず、都市計画の専門家以外にはほとんど知られていないものも多い [……]。今日の都市の多くは、そうした技術官僚や開発業者による行為の集積であることも、忘れるべきではない」³⁹⁾。そもそもル・コルビュジエにこのような都市整備のアクターたちと交渉がなかったわけではない。生前ル・コルビュジエがいくつかの雑誌の編集に携わったことはよく知られている。中でも画家のオゾンファンと共に創刊した『エスプリ・ヌーヴォー』が名高いが、30年代前半に『プラン』や『プレリュード』といった雑誌に「輝く都市」の建築家と共に編集委員として名前を連ねるのが、土木技師やテクノクラートや医師ら——彼らの多くはフランス版ファシスト党であるフェソーに関わった——だったことを等閑視すべきではないだろう⁴⁰⁾。

そのル・コルビュジエに即してもう一つ確認しておきたいのが、彼の計画が辿った運命である。ル・コルビュジエは没後に竣工したのものも含め12カ国で75の建築作品を残したといわれるが、ミッシェル・ラゴンはこれらについて以下のような総括を行う。「ル・コルビュジエは大衆のための建築を渴望し [……]、他のすべての前衛的建築家と同じく、そのイデオロギーは反ブルジョワ的であった。にもかかわらず、彼のクライアントといえどもつぱらブルジョワであり、現代的意匠を施しているとはいえ、結局、19世紀建築の主要な対象であるブルジョワの別荘建築という伝統を継承している。これはまさしく逆説的なことではないか」⁴¹⁾。ル・コルビュジエのこの「反ブルジョワ的」傾向はとりわけ彼の都市計画案におい

て顕著なものであるが、ここでも彼は同様の逆説につきまといわれることになる。同じくラゴンによれば、「ル・コルビュジェの悲劇は [……]、終生、権威や国家を信じたにもかかわらず、マルセイユのユニテ・ダピタシオン以前には、そしてチャンディガール以前には、いかなる国家も彼の言葉を大事に考えはしはなかったことだ。そればかりか、秩序を愛すこの人物は公的には不和の元凶だとみなされていた」⁴²⁾。つまり彼の計画のコアの部分は——おそらく他の多くの建築家・都市計画家と同じく——、ほとんど机上にとどまったということだ。これは私たちの観点からすると、都市計画が表象としてまずは都市に関わるという、ある意味、当たり前でさえある事実を浮き彫りにするだろう⁴³⁾。だとするならば、都市を間に挟んで文学と都市計画という二つの循環運動が存在するとして、そこには二つの表象があるということになるだろう⁴⁴⁾。

3. 文学と都市計画

« ut architectura poesis »⁴⁵⁾。19世紀における文学と建築の関係を探った『エクスポジション』においてフィリップ・アモンが提出する命題は、おおよそこの一文に集約しうるだろう。つまり、文学と建築との構造的同型性である。一方、ロラン・バルトは都市をエクリチュールと見立て、自身のテクスト論と重ね合わせる。「すなわち、都市は、一個のエクリチュールなものです。都市のなかを移動する者、つまり都市の利用者（われわれはみなそうです）は、何をしなければならぬか、どのように移動するかに応じて、同じ言表の様々な断片を取り上げ、それをひそかに現働化する読者なのです」⁴⁶⁾。読者／使用者に重点を置きながら文学と都市／建築の経験を重ね合わせるこのバルトの立場に連なるものとして、ミッシェル・ド・セルトーの都市の実践についての議論がある。しかしセルトーにおいては、これら両者は厳しい対立関係におかれる。世界貿易センターの110階から見下ろしたマンハッタンの眺望から始まる、『日常実践のポイエティック』の「都市を歩く」と題されたつとに名高い一章において、セルトーは次のように書く。「[上方から見たマンハッタンという] このようなコスモスを読む恍惚には、いったいいかなる知の悦楽がむすびついているのだろ

うか。この恍惚感に激しく酔いしれながら、わたしは自問する、「全体を見る」歓び、人間の織りなす数々のテキストのなかでももっとも桁はずれなこのテキストの全貌をはるか上から見はるかすこの歓びは、いったどこからきているのだろう、と。／世界貿易センターの最上階にはこぼれること、それは都市を支配する高見へとはこぼれることだ⁴⁷⁾。そしてセルトーは「はるか上から見はるかすこの歓び」を都市計画的知に結びつける。「世界貿易センターは西欧的都市計画がとる^{フィギュール}すがたの最大の Monument にほかならない。もうずいぶん前から、視による知の非空間^{アトピー}ユートピアは、都市集中から生じる矛盾を克服し分節化しようとする企図をいだきつづけてきた」[142 (203)]。セルトーにとっても都市は意味生成性の場なのであるが、セルトーにおいてはバルト以上にこの意味生成の場は所与の対象ではなく、まずは権力の「戦略stratégies」によって強く規定された空間として定義される。ここにおいて都市計画とは、「自分のものとして境界線をひくことができ、標的とか脅威とかいった外部 [……] との関係を管理するための基地にできるような、ある一定の場所」[59 (100)] の創出であるとみなされる。

そしてこの「戦略」に対して「戦術 tactiques」が対置される。バルトにおいてはむしろ中性的な性格を備えていた都市の「使用者」による都市の「現働化」は、権力による管理空間としての都市というフーコー的命題を念頭におきつつ、「自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地、他から押しつけられた土地のうえでなんとかやっつけていかざるをえない」[60 (102)] 者が編み出す「戦術」として再構成される。都市においてこの「戦術」は、摩天楼のはるか下方で営まれる「歩行」という些細な営為のうちに宿っている。言語学のモデルに従ってこれを公式化するセルトーによれば、「歩く行為の都市システムにたいする関係は、発話行為 (speech act) が言葉や言い終えられた発話にたいする関係にひとしい」[148 (210)] とされる。つまり都市計画の空間とは差異の体系としてのラングに等しく、歩行とはこのラングを現働化するパロールあるいは言表行為に該当する。だが人は設計されたラングとしての街路に即して都市を経験するだけだろうか。もちろんセルトーにとってはそこからの踏み外しにこそ抵抗の好機がある。「歩行者は、空間「言語」のシニフィアンを選

びわけたり、自分なりの使いかたでそれをずらしたりしながら、不連続性をつくりだしてゆく。[……]「めったになく」、「ふとした偶然から生まれた」非合法的な空間「表現」を組み立てて」[149 (212)] いくことで、都市計画の裏をかく。その一方で、この抵抗の「戦術」は意識的な逸脱やアプロプリエーションを通してのみ現れるわけではない。セルトーは、「都市工学のシステム性を逃れるようなありかたで、都市の／都市にかんするディスクール」として「信じられるもの」「記憶にされるもの」「原初のもの」[158 (224)]を挙げることを忘れない。これらは、権力の「戦術」的空間に紛れ込んで特殊な磁場を形成し歩行者をふいに捉える地名や場所にまつわる迷信や想い出、あるいは精神分析的な原初的空間経験を指す。

このようにセルトーが描き出す日常の実践と都市計画的知の対立において、文学はどのように位置づけられるだろうか。小説と都市計画それぞれについて都市に対する循環性を確認したが、これらふたつはセルトー的な対立を生きているとひとまずは考えられるはずだ。すなわち、ユートピア文学というのであれば、文学作品に見いだすことができるのはおおよそ逸脱する「歩行」の「戦術」ではあるまいか。しかもむしろ無意識の「戦術」こそがある力を持って現れているように見える。なおかつ文学において都市の向こう側にさらに都市計画という表象の存在を意識するのなら、とりわけ19世紀のフランスにおいて際立っているのはボードレルのケースであろう。セルトーは、上方から都市を見おさめようという視線＝知の実践が中世やルネサンスに遡るものでもあると述べている [140-141 (200)]⁴⁸⁾。19世紀においてこのようなまなざしのひとつは、18世紀に誕生しすでに一般的なものとなっていた熱気球によって与えられた。ナダールが気球から撮影した名高い写真(1868)が示しているように、超高層建築物がほぼ皆無だったこの時代にあつて、気球に乗ることで人々は凱旋門よりもはるかに高い位置からしかも自在に首都を見下ろす視点を獲得することができた。多木浩二はこのような「空からの視線は地図のまなざし」⁴⁹⁾でもあったとした上で、「実測する地図のまなざしは、本来機能的であり、都市は全体として見えるものに組み立てられ、交通網として計画することが可能」⁵⁰⁾になるとする。これはオスマンがパリを改造するにあた

ってパリの正確な地図を作らせた時代でもあった。ここからオスマンの都市計画も典型的に、セルトーが描き出すような上方からのまなざしによって構想されていたと考えることが可能はずだ。ベンヤミンが資本主義の「幻像」^{ファンタスマゴリー}からの歴史的覚醒の契機をボードレールにおける「遊歩者」に求めることはつとに知られているが、ある意味、この「遊歩者」はオスマン時代の「戦術家」でもあるだろう。「[ボードレール]の文学は郷土文学ではない。都市を捉えるアレゴリー詩人のまなざしは、むしろ疎外された[他郷者になった]人のまなざしである。それは遊歩者のまなざしである」⁵¹⁾。都市を上方から計画するまなざしを、計画的空間において異邦人として振る舞う「遊歩者」のまなざしが見返す。とはいえ、ベンヤミンはオスマンの都市改造の主要な目的として秩序維持という政治的次元を強調する見方を助長したということは指摘しておくべきかもしれない。ベンヤミンが厳密な意味での歴史学を目指したわけではないということはもちろんある。だが、現在ではこのような見方は公衆衛生など社会的次元の重要性を見直す研究によって補完される傾向にある⁵²⁾。ならば、このような文脈にボードレールの作品を位置づけ直した際にいかなる問題が浮上するかと問うてもいいはずだ。これをフォーコー的問題として整理するならば、パノプティコンに象徴される規律権力から生政治への焦点の移動として立ち現れることだろう⁵³⁾。実際、第二帝政期のオスマンのパリ改造はパノプティコンに擬えられることがあるが、しかし先に書いたとおり、そこには公衆衛生など、主体化の問題を超えて社会体としての人口を管理するような次元が不在なわけではなかった。このような次元がより強化されるのは続く第三共和政であるとする見方もあるが⁵⁴⁾、いずれにせよボードレールの遊歩者もこのような次元を都市の経験として生きていたはずだ。

その一方で、ボードレールの文学はむしろ計画的なものと文学との断絶を際立たせてしまうのではないかという危惧めいた予感がないわけではない。しかもこのような断絶の可能性はもとよりセルトーの議論に内在するものとしてしばしば批判の対象となっているということがある。例えば、エドワード・ソジャによるそれ。「このような[ミクロな視点の]特権化は、都市的状況の全体論的読解に対する軽蔑、そして「下からの眺め」——極度に局所化された遊歩者の個々の声にもっともよく示されている、日常生

活の詳細な民族誌 ethnography – 地誌 geography ——に対する暗黙の、そうでなければ全面的な選好という、二つの態度に表れている。これはルフェーブルが言及した建築家とプランナーという古い分割そのものではないが、それと同じように分断する効果ないしは分裂を生じさせる効果がある⁵⁵⁾。ここで都市計画に目を転じれば、20世紀においてはとりわけCIAM解体以降、むしろ上方からのまなざしと下方からのまなざし＝歩行の「分断」を乗り越えようとする試みが連綿と続けられてきたということがある。例えば、シチュアシオニストによる「漂流」の経験を計画モデルに組み込むコンスタント「ニュー・バビロン」からアレグザンダーの「セミラティス」を経て、ジェイン・ジェイコブズの「ハード」な闘争から市民参加型のオープンプロセスによる「ソフト」なプランニングにいたるまで、都市計画は様々なかたちでこの「断絶」を埋めようと試みてきた⁵⁶⁾。もちろん文学にも都市の利用者と計画家との大いなる「和解」を物語ることができないわけではない。だが、説話として予定調和に陥りやすいこのような物語を必ずしも文学者たちは選択してこなかったということがある。それに「和解」も結局のところ「断絶」を前提としている以上、容易に「断絶」へと再び解かれていくということもあるだろう。

ならば、むしろ両者の「絡み合い」のようなものこそを問題にすべきではないだろうか。これが困難な問いかけであることは容易に想像がつくが、ここではジャック・ランシエールによるバルザックの『村の司祭』の読解を手がかりにこれを見ていこう。ランシエールによれば、物語と場所の関係には二つのタイプがあるという。すなわち、「作中人物が場所や財産を見出すまで場所から場所へと渡り歩く物語」⁵⁷⁾であり、「空間が物語を包摂する枠となり、環境が登場人物やその関係を産み出している」[115 (139)] 物語である。前者は『オデュッセイア』や『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』によって代表され、後者は場所と登場人物との間に換喩的關係を設定する物語であり、これは例えば一連のバルザックの小説にその典型が見出されるだろう。ところがランシエールに従えば、同じバルザックの『村の司祭』はこれら二つのタイプとは異なる第3のタイプに属しているという。『村の司祭』はヴェロニックというある犯罪に関わった女性の物語であるが、ランシエールはこの犯罪が言葉の変調によってもた

らされたとする。そもそも「言葉は身体によって運ばれ、ひとつの身体から別の身体へと差し向けられ、体験された状態とか遂行すべき行為を指し示す。すべての言葉には、はっきりと決められた起点と終点があり、だからすべての言葉は、しかるべきところにある身体の秩序だった配置のなかに刻まれ、身体の機能のなかに刻み込まれる。混乱が生じるのは、こうした空間が宛先不明のいくつもの空間によって横断され、穴をうがたれるときである」[124 (153)]。しかしいかにして？ この作品の中心的登場人物は屑鉄商の娘（ヴェロニック）と若い陶器職人——「庶民階級に属す二人の子供」[122 (150)]——であるが、彼らには固有の言語があり、それは彼らの身体に取り憑き彼らの行為や状態を規定すると同時に、彼らが空間的に配置される社会秩序にも対応している。ここで問題になっているのは、おおよそ先にふれた近代以前の「全体的で包括的な意味のシステムとしての都市」であるといっている。しかしそのような安定した言語・身体・空間の複合体としての社会的秩序のうちにぼつんと鳥のように置かれたまた別の言葉が存在している。「言説の正当な秩序の変調であり、言説が配分される仕方の変調であり、同時に言説が秩序だった共同体に身体を配分する仕方の変調」[115 (125)] をもたらすこの言葉とは、すなわち文学作品によってもたらされるエクリチュールのことである。ヴェロニックはある小説（『ポールとヴィルジニー』）を偶々——ある意味、セルトーによる無意識的な逸脱に連なるような仕方でも——手に入れ、つまりこの「鳥としての言葉」[126 (156)] に思いがけずふれることで、彼女が生きる言語・身体・空間が織りなす秩序からさまよい出る。彼女の悲劇はそれが犯罪という形をとったことである。しかしランシエールはこのような「鳥」としての言葉の力こそを「文学性という出来事」[126 (157)] と呼び、さらには語源に遡って「地理的に切り離された行政区^{デモス}」という深層の意味を掘り起こしながら、これを「民主主義」に結びつける。

言語・身体・空間の安定した複合体に基盤をおく秩序は社会的ゾーニングに関わるものということも可能かもしれないが、そこからの逸脱にこそ文学と民主主義の可能性が胚胎する。だがそういえるとして、これもやはり都市の使用者と計画家との断絶の物語のヴァリエーションにすぎないのではないか。『村の司祭』が興味深いのは、「庶民階級に属す二人の子供」

が置かれた空間的配置に穴が穿たれるだけでなく、それが再分配される様子を具体的に示している点である。実際、ヴェロニックは「島としての言葉」によって言語・身体・空間が織りなす秩序から犯罪という形で足を踏み外すだけでなく、これを贖うために象徴的に新しい空間の配置を生み出すことに専心する。「島としての言葉は、身体と身体のあいだにある空間を再分割し、その共同体を規範化している空間を再分割する。島としての言葉は、共同体の地形図の上に、別の地形図を描く。そしてこの別の地形図が、別の共同体の島としての空間を切り分ける」[126 (156)]。ヴェロニックは、根気強い開墾事業を通してこれを実践しようとするだろう。作品の最終部は後半生を捧げた彼女のこの大規模な土木工事の挿話によってほとんど埋め尽くされている——本稿の銘句として掲げたのは、この『村の司祭』が重要なモチーフとして組み込まれた大江健三郎の小説の主人公マリエの台詞だ。

エクリチュールとの接触により、こうしてヴェロニックのうちに歩行者と計画家の双方が宿る。歩行者は「消えた足どりの話し声」[Certeau, 147 (208)]を計画家の耳に届けるだけでなく、彼あるいは彼女自身、計画家となり新しい空間を切り拓く。ランシエールによる『村の司祭』の読解において、文学は空間と静的な関係を取り結ばない。すなわち、場所は背景として物語を支えるわけでもなければ、物語と同じ性質を共有するわけでもなく、ましてやたんに小説家の「鏡」に表象されるだけでもない。むしろエクリチュールとは計画的空間における一つの出来事であり、それ自体、空間の再編成を促す契機となる。

ところが、このランシエールによる『村の司祭』の読解に、私たちとして一つの後日談を付け加えることが可能なように思われる。ランシエールはヴェロニックによる土木事業を、「感覚世界の実際の変化として、事物の組織じたいに刻み込まれるエクリチュール」[129 (162)]の実践として鉄道の敷設や水路の確立を検討していたサン＝シモン主義者の活動、とりわけミシェル・シュヴァリエの言動に結びつける。ところが理工系エリート養成機関であるエコール・ポリテクニクの卒業生であるシュヴァリエは、七月王制下に一旦サン＝シモン主義のサークルに身を投じそのプレーンとして活躍するものの、第二帝政期には経済顧問として皇帝であるナ

ポレオン三世に登用されることになる⁵⁸⁾。そして第二帝政下において、ベンヤミンをして資本主義文化の「ファンタスマゴリー幻像」が「まばゆいばかりの最盛期を極める」⁵⁹⁾といわしめた1868年の万国博覧会を実現したのがほかでもないこのシュヴァリエなのだった。その一方で、これはナポレオン三世のもう一人の懐刀としてオスマンがパリ改造に着手した時代でもあった。だとすれば、「島としての言葉」に導かれたヴェロニックの逸脱する歩みも集権的な都市計画の上方からのまなざしに反転する危うさを秘めているのではないか……。文学と都市計画との「絡み合い」は、これまで見てきたようなエクリチュールを起点とする問題にむろん限定されるものではないが、このような反転も含めてこの「絡み合い」を考えなければならないはずだ。

4. 鷗外とセリーヌ

この二人の作家に何らかの接点を見出すことははたして可能だろうか。鷗外はむろん明治を代表する作家として文学史にその名を刻み込んでいる。一方、セリーヌは1930年代前半に『夜の果てへの旅』でセンセーショナルな作家デビューを果たすも、やがて悪名高い反ユダヤ主義者として知られることにもなる。なるほど、鷗外は1884年から1888年までドイツに留学しているが、1894年にパリ近郊で誕生したセリーヌことルイ・デトゥーシュと出会えるはずもない。日本にいながらも欧州事情に通じていた鷗外であるが、1922年に没するその彼が、1932年に出版された『夜の果てへの旅』を読んだなどということもありうる話ではない。このように作家であるという以外に接点がないかに見える鷗外とセリーヌだが、実のところこの二人はともに医者であったという共通点を持っていた。鷗外が軍医として陸軍省医務局長にまで上り詰めたことは人口に膾炙しているが、セリーヌが最晩年まで診療所を開き地域医療に従事していたことはもしかするとあまり知られてはいないかもしれない。同様に、鷗外についても彼が臨床医ではなく、公衆衛生医であったことはそれほど知られてはいないだろう⁶⁰⁾。しかし若き日の鷗外がドイツに渡ったのは、ドイツ軍の衛生制度を研究するためであり、コッホやペッテンコーファーらに師事し、当時として最新の細菌学や衛生学を修めるためだった⁶¹⁾。一方、セリーヌも、20年代

末から開業医として医療に従事していたわけだが、『夜の果てへの旅』で描かれるような場末の開業医となる以前には、国際連盟の社会衛生局に勤務していたのだった（1924-27）。またパリ医学部に提出した学位論文は、1840年代にパスツールやコッホの細菌学に先駆けて微生物病因説を唱えたものの、医学界から黙殺されたセンメルヴェイス（ゼンメルヴァイス）の伝記である⁶²。

文久年間（1862）に生まれ、明治を生き、大正に没した鴎外であるが、セリーヌの側から見ると、彼の生きた時代はまさしく第三共和政（1870-1940）と重なっており、ポスト・オスマン期と呼びうる時代であった。これは、第二帝政期（1852-70）の首都改造において本質的な役割を担うことが期待されたものの一旦は後退した公衆衛生が再興し、世紀の転換とともに台頭してくる都市計画という知へと吸収される時代でもある。不衛生住宅の衛生化法について論じながら、大盛弘喜は次のように述べる。「このように、結核が猖獗を極めた地区の衛生化という名の取用事業は、もはや公衆衛生という範疇を超えて、取容後の跡地利用、つまり公共的空間をどう利用するかという都市計画urbanismeに関わるまでになったので、「健康に害を及ぼす地区」の取用と再開発には、二つの戦争〔普仏戦争と第1次世界大戦〕を挟んで半世紀余を要したのである」⁶³。おおよその時代に公衆衛生学にふれた両者が、都市計画的提案を行っていることは決して偶然ではないだろう。鴎外は帰朝後まもなくのいわゆる戦闘的啓蒙期において公衆衛生学の論評を書くなかで、衛生医としての観点からしばしば都市計画を取り上げ、さらには先にもふれた東京市区改正計画の専門委員会に名前を連ねることにもなるだろう⁶⁴。セリーヌはといえば、国際連盟時代の報告書などに都市計画に関わる発言を交えているが、より明確な都市計画的な提案と呼びうるようなものを反ユダヤ主義文書である『皆殺しのための戯れ言』（1937）のなかで行うことになる⁶⁵。そして何よりも、セリーヌは国際連盟を辞した頃から小説の執筆（当初は戯曲）を開始するのだが、『夜の果てへの旅』や次作の『なしくずしの死』（1936）の時期には公衆衛生への関心がまだ持続していた。鴎外が「舞姫」（1890）などの作品を執筆したのもまさしく戦闘的啓蒙期である。セリーヌと鴎外のうちに、『村の司祭』のヴェロニックのように、あるいは異なる仕方で、小

説のエクリチュールと計画的知が重なりあう。彼らの作品が映す都市のあり様が、彼らをして公衆衛生医として都市への介入を誘発したのであろうか。彼らがこれらの作品でパリやベルリンを描き出すとき、都市計画ともつながる公衆衛生的ディスクールは小説のエクリチュールにどれほど絡みついていたのだろうか。この絡み合いのうちにこそ、文学と都市計画が一つの時代において形作るある問題の布置が開かれているように思われる。

註

1. ヘーゲル『美学講義』下巻、長谷川宏訳、作品社、1996、p. 322（強調原文）。
2. しかし例えば若林幹夫が以下の漱石論においてこのような一般的な見方を批判していることを注記しておく。『漱石のリアル——計量としての文学』紀伊國屋書店、2002、p. 21-23。
3. 代表的なものとして、以下の記念碑的な研究を挙げることができるだろう。前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、1992。
4. Jean-Yves Tadié, *Le Roman au XXe siècle*, Pierre Belfond, coll. « Agora », 1990, p. 126（ジャン＝イヴ・タディエ『20世紀の小説』牛場暁夫ほか訳、大修館書店、1995、p. 179）。
5. *Ibid.*, p. 126-127（同上、p. 179-180）。
6. スタンダールのこの一節については、以下の古典的研究を参照のこと。Georges Blin, *Stendhal et les problèmes du roman*, José Corti, 1954, p. 57-62。
7. *Op.cit.*, p. 127（前掲書、p. 180）。
8. Françoise Choay, « Pensées sur la ville, arts de la ville », dans Maurice Agulhon (ed.), *La Ville de l'âge industriel. Le cycle haussmannien (L'Histoire de la France urbaine, t.4.)*, Seuil, coll. « Points Histoire », 1998, p. 197。
9. Honoré de Balzac, « L'avant-propos », dans *La Comédie humaine*, t.1, Gallimard, coll. « Pléiade », 1951, p. 16（オノレ・ド・バルザック『人間喜劇』総序』大矢タカヤス訳、『バルザック『人間喜劇』全作品あらすじ』藤原書店、1999、p. 10）。
10. デヴィッド・ハーヴェイ『パリ モダニティの首都』大城直樹・遠城明雄訳、青土社、2006、p. 36。
11. 同上、p. 34。
12. 同上、p. 36。
13. Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, dans *Romans et nouvelles*, t.1, Gallimard, coll. « Pléiade », 1948, p. 557（スタンダール『赤と黒』下巻、野崎敏訳、光文社古典新訳文庫、2007、p. 280）。
14. Jacques Dubois, *Les Romanciers du réel. De Balzac à Simenon*, Seuil, coll. « Points Essais », 2000, p. 52（ジャック・デュボワ『現実を語る小説家たち——バルザックからシモンンまで』鈴木智之訳、法政大学出版局、2005、p. 58）。
15. Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, dans *Ceuvres romanesques*, Gallimard, coll. « Pléiade », 1981, p. 15-16（ジャン＝ポール・サルトル『嘔吐』鈴木道彦訳（新訳）、人文書院、2010、p. 21-22）。
16. Jean-Paul Sartre, *Qu'est-ce que la littérature ?*, Gallimard, coll. « Folio Essais », 2008, p. 28（ジャン＝ポール・サルトル『文学とは何か』加藤周一ほか訳、人文書院、1998、p. 29）。強調原文。

17. このような循環性はまた、「地理学的文芸批評géocritique」を提唱するベルトラン・ウエストファルの議論にも見られる。Bertrand Westphal, *La Géocritique. Réel, fiction, espace*, Minuit, coll. « Paradoxe », 2007, p. 273.
18. 若林幹夫『都市論を学ぶための12冊』弘文堂, 2014, p. 173。
19. 後に見るとおり、日本において「都市計画」の語は都市計画法を前提とする都市整備事業を指すことが一般的だが、すでにスタンダールの「街道監督官」から説き起こしたように、本稿では「都市計画」をその狭義の意味に限定せずに土木事業等を含む広義の意味において基本的に使用する。
20. 三宅理一『パリのグランド・デザイン——ルイ14世が創った世界都市』中公新書, 2010, p. 170。
21. 例えば以下を参照。Michel Ragon, *Histoire de l'architecture et de l'urbanisme modernes. 2. Naissance de la cité moderne 1900-1940*, Seuil, coll. « Points Essais », 1986, p. 10.
22. 若林幹夫『都市論を学ぶための12冊』弘文堂, 2014, p. 177。
23. Stendhal, *Lucien Leuwen*, dans *Romans et nouvelles*, t.1, *op.cit.*, p. 557 (スタンダール『スタンダール全集3 リュシアン・ルーヴェン1』島田尚一訳, 人文書院, 1977, p. 4-5)。
24. Le Corbusier, *Urbanisme*, Flammarion, coll. « Champs Arts », 1994, p. 241-260 (ル・コルビュジェ『ユルバニスム』樋口清訳, 鹿島出版会, 1967, p. 232-256)。
25. 法令による介入も都市計画の一環であるという考え方も確かに可能ではあるが、ル・コルビュジェはここで「都市計画」の内実として具体的な整備事業を想定していることを付言しておく。
26. 鳥海基樹は、フランス古典主義期において美装が都市整備において中心的概念として機能したことを確認する一方で、この時代にすでに公衆衛生的観点が萌芽的に存在していたことを指摘し、医学的観点が近代以降の都市計画に特権的だとする見方に対して留保をつけている(鳥海基樹「フランスにおける都市計画と都市計画家像の歴史的定義」『都市計画』日本都市計画学会, n° 297, 2012年6月, p. 10-12)。この点については、公衆衛生の問題を都市整備と関連づけながら論じる1978年11月11日の講義においてフーコーが、法メカニズム, 規律メカニズム, 安全メカニズムは決して継起的なものではなく、むしろこれらは複合体をなしており、変わるのはいづれのあいだの相関システムであるとするしており、この時代、医学(公衆衛生)が主調になったと捉えるべきものであろう(Michel Foucault, *Sécurité, territoire population : Cours au Collège de France (1977-1978)*, Seuil, coll. « Hautes études », 2004, p. 10 ; ミシェル・フーコー『ミッシェル・フーコー講義集成1 安全・領土・人口 コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』高桑和巳訳, 筑摩書房, 2007, p. 11)。
27. Jean-Luc Pinol et François Walter, *La Ville contemporaine jusqu'à la Seconde Guerre mondiale. Histoire de l'Europe urbaine 4*, Seuil, coll. « Points Histoire », 2012, p. 173.
28. Françoise Choay, « Urbanisme », dans Pierre Merlin et Françoise Choay (ed.), *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement*, nouvelle édition, PUF, coll. « Quadrige », 2010, p. 799.
29. Jean-Luc Pinol et François Walter, *op.cit.*, p.194.
30. Françoise Choay, « Urbanisme », *op.cit.*, p. 799.
31. Le Corbusier, *op.cit.*, p. 250 (前掲書, p. 243)。
32. 養原敬ほか『白熱講義 これからの日本に都市計画は必要ですか』学芸出版社, 2014, p. 16-17。
33. 例えば近年出版された以下のような文献。饗庭伸『初めて学ぶ都市計画』市ヶ谷出版, 2008。伊藤雅春ほか『都市計画とまちづくりがわかる本』彰国社, 2011。磯部友彦『都市計画総論』鹿島出版界, 2014。
34. 人文地理学会(編)『人文地理学事典』丸善出版, 2013, p. 354-355。

35. 渡辺俊一『「都市計画」の誕生——国際比較からみた日本近代都市計画』柏書房、1993、p. 12-13。
36. 同上、p. 6。石田頼房『日本近現代都市計画の展開 1868-2003』自治体研究社、2004、p. 81-82。
37. 渡辺俊一、前掲書、p. 101-103。
38. 同上、p. 94。
39. 今村創平『現代都市理論講義』オーム社、2013、p. 26-27。
40. 八東はじめ『ル・コルビュジェ 生政治としてのユルバニスム』青土社、2014、p. 14-16。
41. Michel Ragon, *op.cit.*, p.175.
42. *Ibid.*, p. 171.
43. 表象としての都市計画はまずはユートピアに関わるだろう。イヴァン・クリストはユートピアをより広い意味で捉えつつ、ルドゥーからル・コルビュジェにいたる、パリを舞台とする「アンビルド」に終わった計画を概観している。Yvan Christ, *Paris des utopies. Paris tel qu'il aurait pu être, nouvelle édition revue, corrigée et considérablement augmentée*, Balland, 1977. 以下も合わせて参照のこと。Jean-Pierre A. Bernard, *Les Deux Paris. Les représentations de Paris dans la seconde moitié du XIX siècle*, Champ Vallon, coll. « Époques », 2001, p. 85-128.
44. ここに「表象」概念を都市分析に導入するアンリ・ルフェーヴルの三項図式（「空間的实践」「空間の表象」「表象の空間」）を重ね合わせることも可能かもしれない。Henri Lefebvre, *La Production de l'espace*, Anthropos, 2000, p. 48-49（アンリ・ルフェーヴル『空間の生産』斎藤日出治訳、青木書店、2000、p. 82-83）。また、文学研究において（広義の）都市計画を意識したものとして例えば以下のような先行研究がある。富永茂樹「身体から環境へ」『都市の憂鬱 感情の社会学のために』新曜社、1996。三谷研爾『世紀転換期のプラハ モダン都市の空間と文学的表象』三元社、2010。
45. Philippe Hamon, *Expositions. Littérature et architecture au XIXe siècle*, José Corti, 1989, p. 51.
46. Roland Barthes, « Sémiologie et urbanisme », *CŒuvres complètes, t. II, 1962-1967*, nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 1284（ロラン・バルト「記号学と都市計画」『記号学の冒険』花輪光訳、みすず書房、1988、p. 109）。
47. Michel de Certeau, *L'Invention du quotidien I. Arts de faire*, Gallimard, coll. « Folio Essais », 1990, p. 140（ミシェル・ド・セルトー『日常的实践のポイエティック』山田登世子訳、国文社、1987、p. 200）。以降、本書からの引用はページ数のみ本文中に示す。強調はすべて原文。
48. 鳥海基樹は、ルネサンスから17世紀にかけてのフランスの都市図における鳥瞰図法から透視図法への移行の過程を詳細に跡づけている（鳥海基樹「「ポートレイト（pourtraict）」から「プラン（plan）」へ ルネサンスのパリに於ける都市設計の概念的萌芽とそのための技術的転換に関する研究 その2（完）」『日本建築学会計画系論文集』日本建築学会、n° 600、2006年2月、p. 113-119）。鳥海によれば、この変化は「位相幾何学性（＝分かり易さ）」から「地形測量性（＝正確さ）」への移行であり、これは主に街路の幅員の正確な把握を必要とする「都市の美化」という設計概念の萌芽と対応しているという。
49. 多木浩二「眼の隠喩」『眼の隠喩 視線の現象学』青土社、1982、p.126。以下の文献も併せて参照のこと。小倉孝誠『挿絵入新聞「イリュストラシオン」にたどる 19世紀フランス 夢と創造』人文書院、1995、p.195-242。
50. 多木同上。若林幹夫も地図について、とりわけ主題図を論じながら権力との眼差しとの関係にふれている。若林幹夫『増補 地図の想像力』河出文庫、2009、p. 204-206。
またおもしろいことに、都市計画家のウジェーヌ・エナールは1867年のパリ万国

- 博覧会の跡地利用の案として、シャン・ド・マルスを基地とする飛行船による市内交通網を検討していた。Eugène Hénard, « Le Champ de Mars et la galerie des Machines. Le Parc des sports et les grands dirigeables » (1904), *Études sur l'architecture et les transformations de Paris*, Éditions de la Villette, 2012, p. 111-127.
51. ヴァルター・ベンヤミン「パリ——19世紀の首都」久保哲司訳、『ベンヤミン・コレクション I 近代の意味』1995, p. 346。近森高明は以下の論考において、実際にベンヤミンとセルトーとの、そしてルフェーヴルとの親近性を指摘している。『ベンヤミンの迷宮都市——都市のモダニティと陶酔経験』世界思想社, 2007, p. 200-217。
 52. Fabienne Chevallier, *Le Paris moderne. Histoire des politiques d'hygiène (1855-1898)*, Presses universitaires de Rennes, coll. « Art & Société », 2010, p. 54-55.
 53. この点については、とりわけ以下を参照。Michel Foucault, *Sécurité, territoire, population : Cours au Collège de France (1977-1978)*, *op. cit.* (ミシェル・フーコー『ミッシェル・フーコー講義集1 安全・領土・人口 コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』前掲書)。
 54. Paul Rabinow, *Une France si moderne. Naissance du social 1800-1950*, traduit de l'américain par Frédéric Martinet et Oristelle Bonis, Buchet/Chastel, 2006, p.129.
 55. エドワード・W・ソジャ『第三空間——ポストモダンの空間論的転回』加藤政洋訳, 青土社, 2004, p. 392。
 56. ジェイコブズは、モータリゼーションを特権化してきた近代的都市計画の視点(「車派」)に対して、セルトーのように「歩く派」の観点を擁護している。ジェイン・ジェイコブズ『アメリカ都市の死と生』山形浩生訳, 鹿島出版会, 2010, p. 12。
 57. Jacques Rancière, « Balzac et l'île du livre », *La Chair des mots. Politiques de l'écrivain*, Galilée, coll. « Incises », 1998, p. 115 (ジャック・ランシエール「バルザックと書物の島」西脇雅彦訳, 『言葉の肉 エクリチュールの政治』せりか書房, 2013, p. 138)。以降, 本書からの引用はページ数のみ本文中に示す。
 58. ミシェル・シュヴァリエについては以下を参照。鹿島茂『絶景, パリ万国博覧会 サン=シモンの鉄の夢』小学館文庫, 2000, p. 57-98。
 59. ベンヤミン, 前掲書, p. 340。
 60. 石田頼房『森鷗外の都市論とその時代』日本経済評論社, 1999, p. 1。
 61. 宮本忍『森鷗外の医学思想』勁草書房, 1979, p. 14-15。
 62. セリーヌの医学との関わりについては, 例えば以下を参照のこと。David Labreure, *Louis-Ferdinand Céline, une pensée médicale*, Publibook, 2009。
 63. 大盛弘喜『フランス公衆衛生史 19世紀パリの疫病と住環境』学術出版会, 2014, p. 490。以下も併せて参照のこと。Chevallier, *op.cit.*, p. 54-55。
 64. 石田頼房『森鷗外の都市論とその時代』, 前掲書, p. 266。鷗外における都市および公衆衛生を論じたものとして以下の先行研究を挙げておく。澤野雅樹「衛生都市」『10+1』n° 2, autumn 1994, INAX, p. 224-232。佐藤泉「もっともすぐれた敵——森鷗外の公衆衛生学」『現代思想』2003年11月号, 青土社, p. 198-214。大塚美保「衛生学の二つの顔 日本における公衆衛生学と森鷗外」『國文学 解釈と教材の研究』2005年2月号, p. 52-57。美留町義雄『鷗外のベルリン 交通・衛生・メディア』水声社, 2010。
 65. Louis-Ferdinand Céline, *Bagatelles pour un massacre*, dans *Écrits polémiques*, édition critique établie, présentée et annotée par Régis Tettamanzi, Éditions 8, 2012, p.218-224。

(都市イノベーション研究院・教授)

Littérature et urbanisme

— vers une problématique de la Troisième République

Tomohiro HIKOE

L'urbain constitue l'un des thèmes majeurs des études littéraires depuis déjà longtemps, mais il semble que l'on a attribué beaucoup moins d'importance à l'urbanisme. Celui-ci a, du moins, un point commun avec la littérature : concernant la ville, tous les deux en sont des représentations. Il n'est pas difficile de voir que la ville est représentée d'une manière ou d'une autre dans la littérature. Il en est de même pour l'urbanisme ; ce dernier a beau revendiquer une scientificité, il représente dans son analyse et dans son projet non seulement le présent, mais aussi le passé et le futur de la ville.

Quel est alors le rapport de la littérature et de l'urbanisme ? On pourrait facilement le supposer antithétique. L'un des modèles de cette opposition serait donné par Michel de Certeau ; ce dernier oppose en effet les *tactiques* des utilisateurs de la ville aux *stratégies* de ceux qui font de celle-ci le lieu du pouvoir et de son contrôle. Et la littérature a toute une tradition qui active, volontairement ou pas, les « pas » détournés des utilisateurs de la ville, comme le montre le « flâneur » baudelairien examiné par Benjamin.

Il arriverait pourtant que les deux se mêlent de manière inextricable chez certains écrivains comme Ōgai Mori ou L.-F. Céline. Étant également hygiéniste, celui-ci s'intéressait à l'urbain et à l'urbanisme ; le Paris décrit dans ses romans est-il alors vu par le romancier ou cet hygiéniste ? En tous cas, l'hygiène est l'une des forces motrices de l'urbanisme et de la société urbaine de son époque, qui est la troisième République. Céline nous donnera ainsi une clé pour examiner le rapport de la littérature et de l'urbanisme en cette époque aussi importante que la précédente marquée par l'haussmannisation de la capitale.